

家庭科における手縫いの基礎技能に関する実証的研究

兼 信 英 子*

An Empirical Study of Fundamental Skill of Hand-Sewing in Home Economics

Eiko KANENOBU

(Received October 2, 1989)

In order to clarify the educational differences between the VTR training class and the concentrated training class, 201 educational faculty students of Kumamoto University were investigated by questionnaire.

The results were as follows;

1. Many items of the questionnaire for the fundamental skills revealed differences between the knowledge and the experience.
2. The female students excelled relatively in the practical techniques as compared with the males.
3. The VTR training class was more apprehended than another class, although the concentrated training class obtained better teaching confidence because of the practical experience they had received and of their teachers' encouragement.

緒 言

小学校学習指導要領「家庭」の内容に「布を用いた身の回りの簡単な物の製作ができるようにするとともに身なりを整えることができるようにする」¹⁾ことが明示されている。この「簡単な物の製作ができたり, 身なりを整えたりする」ためには, 製作に必要な手縫いの基礎縫いやボタンつけ等の基礎技能を習得することが必要である。特に, 最近の家庭生活の中では, 糸や針を用いて布を縫う作業が少なくなっている。しかし, 「やった」経験や「できる」自信をもつことにより, ほころび直しやボタンつけを気軽にできるようになり, また, 身なりを整えたり, 身の回りの簡単な物を製作したりする等の行動も容易にできるようになる。

教員養成大学においては, 将来, 小学校教員になる学生が家庭科の教師として児童にそれらの教材を指導する際に, 児童の期待に応えられる十分な資質を養成しておくことが肝要である。そこで, 本研究では, 大学において「家庭科教材研究」を履修している学生の「手縫いの基礎技能」(以下, 「基礎技能」という)に関する現状を把握するとともに, 大学で

学習した基礎技能及びその学習内容の成果等をどう受けとめているかについてその意識と実態を把握するために調査を行った。特に, 本研究で学習形態については, VTR視聴による学習と一斉指導による学習の形態に分け, その効果について検討した。

方 法

調査対象 熊本大学教育学部で「家庭科教材研究」を履修している学生(男子84人, 女子117人の合計201人)であり, 学習形態別の内容は表1に示す通りである。

表1 調査対象

性別	VTR群	一斉指導群	計
男子学生	39	45	84
女子学生	57	60	117
計	96	105	201

調査期日 1989年4月21日, 23日

調査内容 大学生の現状(既習の経験の有無, 日常生活への活用頻度), 大学で学習した基礎技能についてその意識と実態等を以下の調査項目を用いて行った。基礎技能の難易感・達成感, やる気の持続の

* 教育実践研究指導センター

理由、児童に教える自信の有無の程度である。難易感・達成感についてはいずれも5段階尺度とした。難易感は「1. とても易しい」、「2. 少し易しい」、「3. どちらともいえない」、「4. 少し難しい」、「5. とても難しい」を、達成感は「1. とてもうまくできた」、「2. かなりうまくできた」、「3. どちらともいえない」、「4. あまりうまくできなかった」、「5. 全くうまくできなかった」を回答選択肢とした。そのほか項目の選択肢については、結果と考察の項で述べる。

調査方法 無作為に学生をVTR視聴による学習群と一斉指導の学習群に分け、「基礎技能」の学習が終了したあとに質問紙法による調査を行った。人数の平均化を図ったが当日の欠席があり、両群間に多少の差があった。以下、VTR視聴による群をVTR群、一斉指導による学習群を一斉群と略称する。

基礎技能の内容と条件 授業における手縫いの基礎技能の内容(使用教科書²⁾)から選定、しつけとして「一目落とし」⁴⁾を加えた)と条件は下記の通りである。所要時間は名前の縫い取りを含め100分とする。

[基礎技能の条件]布は長さ30cm(晒し木綿、綿100%、糸密度たて22本/cm、よこ21本/cm、1枚の布の厚さは0.37mm)。この布に名前の縫い取りをさせ、糸と針に慣れさせてから基礎技能の学習を行った。糸は綿の三子糸の赤や緑色の糸で一本どりを使用する。ボタンつけだけ2本糸を使用する。

(1)ボタンつけ……つける位置に針を出し、布の厚さ分だけ糸をうかし、2回ボタン穴に通して縫いつける。布とボタンの間に糸を出し、上から下へ2～3回かたくまいて、布のうらに出す。うらで玉どめをし、糸の下を小さくすくってから糸を切る。(2)なみ縫い……20cm。(3)重ねつぎ……20cmのうち8cmのところから糸の色を変えて重ねて縫う。(4)半返し縫い……10cm。(5)本返し縫い……10cm、上記の(2)から(5)の針目は約0.5cmとする。(6)まつり縫い……布を三つ折りにして20cm、針目は表に小さく出し、裏のまつり間隔は約1cmとする。(7)かがり縫い……1枚の布の裁ち目のところを1cm間隔でかがる。(8)一目落とし……布を三つ折りにして針目は3cm、0.5cm落とす。いずれも直線上に縫い終わったら糸こきを十分に玉どめをする。

[針]クロバー(ガスぐけまたはガスぬい)の針を使用する。

[配布資料・その他]各自に図解のプリント、各群とも6人グループにし実物標本を1枚ずつ配布する。

VTRを視聴する群は最初に作業工程をみせ、一つの作業を進める度に分からない時は何度でも繰り返してみることができる。

一斉指導をする群は配布資料の他に教師の説明も加えて指導する。

「VTR教材」教材に即した過程で自作したものを使用し、所要時間は12分である。モニターテレビは6台を使用する。

結果と考察

大学生の現状

1. 基礎技能の既習経験

表2は「基礎技能の既習経験」の結果を示す。布を縫い合わせる基礎である「玉結び」、「玉どめ」、「なみ縫い」は男女とも96%以上の高回答率であり、性差は認められなかった。いずれも日常生活の中で活用されている頻度が高いといえる。それらについて「半返し縫い」、「本返し縫い」があり、両者ともに男子学生は76%以上であり、女子学生は90%台と男子学生より高い回答率であった。ここでは性差は認められた($\chi^2=7.842$, $df=1$, $p<0.01$, $\chi^2=7.781$, $df=1$, $p<0.01$)。「まつり縫い」は男子学生が64%

表2 基礎技能の既習経験 人(%)

基礎技能	性 別	あ る	な い	合 計
玉結び	男子学生	81(96.4)	3(3.6)	84
	女子学生	116(99.1)	1(0.9)	117
玉どめ	男子学生	82(97.6)	2(2.4)	84
	女子学生	115(98.3)	2(1.7)	117
なみ縫い	男子学生	83(98.8)	1(1.2)	84
	女子学生	117(100.0)	0(0.0)	117
半返し縫い	男子学生	65(77.4)	19(22.6)	84..
	女子学生	107(91.5)	10(8.5)	117
本返し縫い	男子学生	64(76.2)	20(23.8)	84..
	女子学生	106(90.6)	11(9.4)	117
まつり縫い	男子学生	54(64.3)	30(35.7)	84..
	女子学生	106(90.6)	11(9.4)	117
かがり縫い	男子学生	17(20.2)	67(79.8)	84
	女子学生	36(30.8)	81(69.2)	117
重ねつぎ	男子学生	11(13.1)	73(86.9)	84
	女子学生	24(20.5)	93(79.5)	117
一目落とし	男子学生	6(7.1)	78(92.9)	84
	女子学生	10(8.5)	107(91.5)	117

χ^2 検定 ** $p<0.01$

台を示し、女子学生は90%台であり、性差が認められた($\chi^2=20.849$, $df=1$, $p<0.01$)。“かがり縫い”については男子学生が20%台であり、女子学生は30%台であった。ここでは性差が認められなかった。“重ねつぎ”は男子学生が13%台であり、女子学生は20%台であった。また、“一目落とし”は男女とも10%以下の僅少であった。上記のいずれの2技能についても、性差は認められなかった。こうした結果から、布を縫い合わせる基礎・基本の“玉結び”・“玉どめ”・“なみ縫い”は100%近い回答率であったが、複雑な縫い方になるにしたがって“経験あり”が減少していた。複雑な縫い方は小学校の時に習っていても忘れていくのかもしれない。しかし、使用頻度が高い技能は慣れて「できる自信」につながるといえる。

2. 日常生活での活用頻度

表3に「日常生活での活用頻度」の結果を示す。“ボタンつけ”をする男子学生は約60%であり、女子学生は94%の高い回答率を示し、女子が男子より有意に「ボタンつけ」を行っていた($\chi^2=35.828$, $df=1$, $p<0.01$)。“ほころび直し”については、男子学生は39%であり、女子学生は約78%を占め性差が認められた($\chi^2=67.744$, $df=1$, $p<0.01$)。“布で物を作る”については男子学生はわずか1.2% (1人)で、女子学生は59.0%であった。ここでも性差が認められた($\chi^2=71.929$, $df=1$, $p<0.01$)。男子学生は実生活においては布で物を作る機会がないといえる。“その他”は男子学生が4.8%、女子学生は11.1%であり、性差は認められなかった。ここでは何に活用しているかを記述させたところ、ズボンやスカートの裾上げ等に“まつり縫い”を活用していた。こうした結果から、多くの男女の学生が実生活においてボタンつけをしており、ほころび直しも男子学生の4割が自分で行っていることが分かった。小学

校の体験が日常生活に活用されているといえる。男子学生の中にも少数ではあるが自分のことは自分でする自立心をもっている学生がいることが分かった。一般に男子学生より女子学生が高い回答率を示したのは小・中・高と一貫した家庭科教育の成果であり、それだけ慣れて技能が身につく実生活に役立っているといえる。

大学生の基礎技能の意識と実態

この「基礎技能」からは大学における授業の内容である。

1. 学習形態による基礎技能の難易感・達成感の比較

表4-1に「学習形態による基礎技能の難易感・達成感の比較」の結果を示す。まず難易感についてみると、VTR群と一斉群のいずれの群も“なみ縫い”、“一目落とし”が「とても易しい」と感じていた。また、“返し縫い”の中では“本返し縫い”が“半返し縫い”より易しいと感じていた。これは針目が縫いはじめのところに返るので、結果として易しいと感じられたのであろう。また、“半返し縫い”は針目が半分戻るので、戻る針目の大きさにより針目が不揃いになるため不安が伴うのではないかと思われる。“ボタンつけ”についてはVTR群は3番目に、一斉群は4番目にあがっており必ずしも易しいとは感じていないことが分かった。これは、“ボタンつけ”は日常生活で活用することが多いけれども、“ボタン”の丈夫なつけかたを学習し、糸の始末のしかたまで含めるとそれほど容易ではないと感じたからであらう。“まつり縫い”、“かがり縫い”は相対的には他の縫い方よりも難しいと感じていた。それは、針目の間隔や糸の渡し方が不揃いになるためであらう。特に“まつり縫い”の場合は、表目を小さく出して裏布をすくう行為が難しく感じられていると推察される。また“重ねつぎ”については糸の重なりを明確にするために糸の色を途中で取り替えさせて縫わせたが、前の糸とかえた糸を少しずらして重ねて縫うことを難しく感じている。間違えて縫う学生のなかには糸を交互に出して縫う学生もいた。

達成感については、いずれの群も“ボタンつけ”は、実際にやってみたらかなりうまくできたと答えている。難易感を聞いた場合には、必ずしも易しいとは予想していなかったのであるが、実際に経験をすると、糸の始末なども比較的うまくできたようだ。“かがり縫い”はあまりうまくできなかったとの回答が多く得られた。“かがり縫い”は日常生活で経験す

表3 日常生活での活用頻度 人(%)

基礎技能	性別	する	しない	合計
ボタンつけ	男子学生	50(59.5)	34(40.5)	84
	女子学生	110(94.0)	7(6.0)	117
ほころび直し	男子学生	16(39.0)	68(61.0)	84
	女子学生	91(77.8)	26(22.2)	117
布で物を作る	男子学生	1(1.2)	83(98.8)	84
	女子学生	69(59.0)	48(41.0)	117
その他	男子学生	4(4.8)	80(95.2)	84
	女子学生	13(11.1)	104(88.9)	117

χ^2 検定 ** $p<0.01$

表 4-1 学習群による基礎技能の難易感・達成感の比較

基礎技能	全体 n=201			VTR群 n=96			一斉群 n=105		
	難易感	達成感	t 検定	難易感	達成感	t 検定	難易感	達成感	t 検定
ボタンつけ	2.39±1.06†	2.33±1.06†		2.32±1.14†	2.25±1.03†		2.46±0.97†	2.41±1.05†	
なみ縫い	1.84±0.88	2.43±0.88		1.81±0.87	2.46±1.05		1.86±0.89	2.41±1.09	
半返し縫い	2.49±1.08	2.67±1.08		2.48±1.14	2.77±1.07		2.50±1.02	2.56±1.04	
本返し縫い	2.37±1.08	2.54±1.08		2.33±1.13	2.52±1.04		2.40±1.03	2.55±1.05	
まつり縫い	2.87±1.20	2.89±1.20		2.93±1.26	2.96±1.08		2.82±1.14	2.83±1.11	
かがり縫い	2.84±1.16	3.15±1.16	*	2.88±1.24	3.28±1.06	*	2.80±1.07	3.03±1.13	
重ねつぎ	2.51±0.95	2.67±0.95		2.50±0.99	2.68±0.99		2.52±0.91	2.67±0.97	
一目落とし	2.22±1.12	2.55±1.12	**	2.29±1.20	2.57±1.04		2.15±1.04	2.52±1.09	*

†: 平均値±標準偏差, * $p<0.05$, ** $p<0.01$

る機会が少ないので、実際にあまりうまくできなかったといえる。VTR 群、一斉群で共通していることは“ボタンつけ”は予想していたよりもうまくできたという結果であった。“なみ縫い”、“一目落とし”は易しいと思っていたが、実際にやってみると、それほど易しくはなかったという回答が得られた。認識と体験との間に相違があったことが分かる。他の項目も同様な傾向がみられた。既習経験があっても更に学習を積み上げて慣れることが大切だといえる。

2. VTR 群による基礎技能の難易感・達成感の比較

表 4-2 に「VTR 群による基礎技能の難易感・達成感の比較」の結果を示す。難易感を見ると、最も易しいと感じているのは男女とも“なみ縫い”であった。男子は“ボタンつけ”、“一目落とし”、“本返し縫い”、“半返し縫い”、“重ねつぎ”、“かがり縫い”、“まつり縫い”の順に易しいという程度が減少

している。すなわち、針の運び方が複雑になるにしたがって易しいと感じている割合が減少しているのである。女子学生の場合には“なみ縫い”、“一目落とし”、“本返し縫い”、“半返し縫い”、“重ねつぎ”、“まつり縫い”、“かがり縫い”の順に易しさの程度が減少し、特に“ボタンつけ”が易しいと感じる回答が最も少ない。男女の間で“ボタンつけ”に対する順位が異なっていた。女子学生は与えられた縫い方のなかでは最も低く、その意味ではそれほど易しいとも感じていないといえる。これは、女子学生は糸の始末がうまくできることまで含めて考えるために、その部分を「易しくはない」と感じたものと推察される。達成感を見ると男女とも“ボタンつけ”はやってみたら、思ったよりうまくできた」と回答している。これは表 3 の結果から見られるように身なりを整えるために日常生活の中で多く活用をしている

表 4-2 VTR 群における基礎技能の難易感・達成感の比較

基礎技能	男子学生 n=39			女子学生 n=57		
	難易感	達成感	t 検定	難易感	達成感	t 検定
ボタンつけ	2.13±1.04†	2.03±1.05†		2.46±1.19†	2.40±0.99†	
なみ縫い	2.03±1.00	2.39±1.12		1.67±0.73	2.51±0.99	
半返し縫い	2.87±1.11	3.00±1.09		2.21±1.07	2.61±1.02	
本返し縫い	2.74±1.21	2.80±1.14		2.05±0.98	2.33±0.92	
まつり縫い	3.72±1.06	3.54±0.98		2.34±1.09	2.56±0.96	
かがり縫い	3.49±1.13	3.67±1.00		2.46±1.14	3.02±1.02	*
重ねつぎ	3.03±0.92	2.95±1.11		2.14±0.87	2.49±0.86	
一目落とし	2.25±1.25	2.85±1.19		1.91±1.00	2.39±0.87	*

†: 平均値±標準偏差, * $p<0.05$

ことにも依っている。やはり経験の積み重ねが大切である。女子学生については“ボタンつけ”だけが予想よりうまくできたと感じているが、他の項目は、易しいと感じて実際にやってみると、うまくできなかったと認知している。“なみ縫い”は、易しいと思ったが、実際にやってみると、針目を揃えたり、一直線上に縫うことがうまくできなかったようだ。“かがり縫い”についても、できあがってみると自己満足のいくできではなかったといえる。男子より女子学生のほうが自己評価が厳しいのかもしれない。

3. 一斉群による基礎技能の難易感・達成感の比較

表4-3に「一斉群による基礎技能の難易感・達成感の比較」の結果を示す。難易感については一般に男女とも相対的に易しいと感じているのは“なみ縫い”、“一目落とし”であった。男子学生は、“まつり縫い”、“かがり縫い”を相対的に難しいと感じていた。“半返し縫い”や“本返し縫い”は「どちらともいえない」という回答が多くみられた。女子学生の場合には、いずれも「易しい」という回答をする傾向がみられた。“まつり縫い”や“かがり縫い”などは糸の渡し方や糸の引き加減について、日常生活での経験の少ない男子学生はそれらを相対的に難しく感じたようだ。全体的に女子学生のほうが男子学生より易しいと感じていた。達成感については男子学生は予想したよりすべて思ったよりうまくできなかったと回答している。女子学生は“ボタンつけ”についてだけは、はじめに感じたよりうまくできたと評価している。以上の結果より実技を伴う教材は既に経験があっても更に、実習などを通して技能を身につけることが大切であることが見いだされた。経験することは「やった」自信にもつながり、自己

教育力を増すものと考えられる。

4. 2要因の分散分析

基礎技能の結果を検討するために、性別(A)、学習形態(B)の2要因の分散分析を行った。その結果を表5に示す。難易感については、性別の有意差が多くの基礎技能に認められた。いずれも女子学生の方がより「易しい」と予想していた。学習形態については有意差が認められなかった。性別と学習形態との関係については、“ボタンつけ”において交互作用が見いだされた(図1)、難易感については学習形態によって、男女に認知の違いがあることが示唆されている。一方、達成感については、“ボタンつけ”・“なみ縫い”を除いた他の基礎技能の性別に有意差が認められた。女子学生の方が「うまくできた」と回答している。“かがり縫い”においては一斉群のほうがより「うまくできた」と回答する傾向が認められた。“ボタンつけ”の場合には性別と学習形態の交互作用が認められた(図2)。

5. やる気の持続の理由

図3に「やる気の持続の理由」の結果を示す。VTR群と一斉群を比較してみると“やり方が分かった”のはVTR群で69%、一斉群は50%であった。“教師にほめられた”ことによりやる気が持続したのはVTR群が10%、一斉群は22%であった。“友人にほめられた”のはVTR群は3%であり、一斉群は10%であった。その他の回答は10%以下であったが、その理由は「教材が面白い」、「久しぶりに針を持ったがうまく縫える」、「一つがすぐ出来上がるので楽しい」などがあげられていた。無答が10%程度いたことにも注目しておくべきである。この理由は「まったく縫えない」、「針目が揃わない」などがあげられ

表4-3 一斉群における基礎技能の難易感・達成感の比較

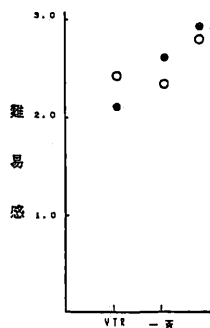
基礎技能	男子学生 n=45			女子学生 n=60		
	難易感	達成感	t検定	難易感	達成感	t検定
ボタンつけ	2.62±1.02†	2.64±1.14†		2.33±0.91†	2.23±0.94†	
なみ縫い	2.00±0.99	2.47±1.11		1.75±0.81	2.37±1.08	
半返し縫い	2.87±1.11	2.89±1.12		2.22±0.83	2.32±0.90	
本返し縫い	2.82±1.09	2.96±1.10		2.08±0.84	2.25±0.91	
まつり縫い	3.51±0.99	3.40±1.04		2.30±0.86	2.40±0.95	
かがり縫い	3.16±0.99	3.20±1.11		2.53±1.06	2.90±1.12	
重ね縫い	2.98±0.89	3.00±0.97		2.18±0.76	2.42±0.90	
一目落とし	2.56±1.05	2.76±1.12		1.85±0.93	2.35±1.03	

†: 平均値±標準偏差

表5 2要因の分散分析の結果(差について有意差が見出された要因)

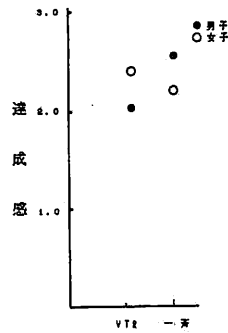
	基礎技能	性別(A)学習形態(B) (A)×(B)	F	df
難 易 感	ボタンつけ	*	F= 4.20	1/197
	なみ縫い	*	F= 5.19	1/197
	半返し縫い	**	F=19.51	1/197
	本返し縫い	**	F=23.85	1/197
	まつり縫い	**	F=73.95	1/197
	かがり縫い	**	F=28.09	1/197
	重ねつぎ	**	F=47.06	1/197
	一目落とし	**	F=29.77	1/197
達 成 感	ボタンつけ	*	F= 6.90	1/197
	なみ縫い		F= 0.004	1/197
	半返し縫い	*	F=10.49	1/197
	本返し縫い	**	F=16.54	1/197
	まつり縫い	**	F=48.80	1/197
	かがり縫い	[** **]	A)F= 9.45 B)F= 3.64	1/197 1/197
	重ねつぎ	**	F=14.33	1/197
	一目落とし	**	F= 8.31	1/197

* $p<0.05$, ** $p<0.01$



* $P<0.05$

図1 ボタンつけ



* $P<0.05$

図2 ボタンつけ

ていた。各群を性別で見ると、VTR群は“やり方が分かった”のは男子学生に61.6%，女子学生が71.3%あり，“教師にほめられた”が男女とも10%前後あり，“友人にほめられた”のは女子学生のみであった。一斉群は“やり方が分かった”が，男子学生は55.6%，女子学生が45.0%であり，“教師にほめられた”のは，男子学生が26.7%，女子学生は16.7%あり，“友人にほめられた”が男女とも10%前後であった。性差はいずれの群にも認められなかった。しか

し，両群間には有意差が認められた ($\chi^2=9.624$, $df=3$, $p<0.05$)。この結果から，VTR群はテープを繰り返して見ることができるため，具体的にやり方が分かり，やる気が持続したのであろう。やり方が分かることは楽しい学習ができ，やる気の持続には重要な要因である。一斉群の方は5割がやり方が分かり，さらに教師や友人に認められてもらい，励ましてもらうことによってやる気が持続したといえる。全体では9割の学生にやる気があったのは，縫

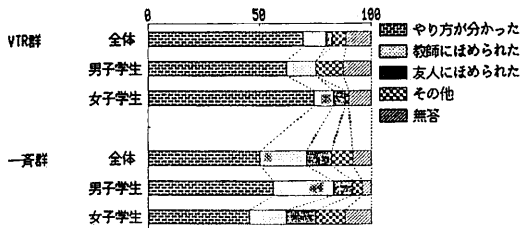


図3 やる気の持続の理由

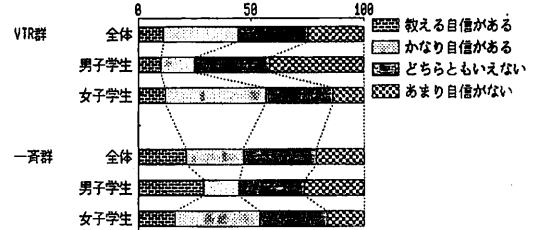


図4 児童に教える自信の程度

う距離が短く早くで上がるのも大切な要因であったと考える。

6. 児童に教える自信の程度

図4に「児童に教える自信の程度」の結果を示す。VTR群と一斉群を比較してみると「教える自信がある」のはVTR群が11.5%、一斉群は21.9%で、一斉群のほうが自信のあることが分かった。これは、図3の結果と併せ考えると教師や友人にほめられ認められて自信がついたと思われる。「かなり自信がある」についてはVTR群は32.3%、一斉群は27.9%であった。各群を性別でみると、VTR群の男子学生は「教える自信がある」と回答した者が13.3%あり、女子学生は12.3%であり、「かなり自信がある」では男子学生が15.4%、女子学生は43.9%であり、また、「どちらともいえない」は男女とも30%前後を示した。「あまり自信がない」は男子学生が41.0%、女子学生は14.0%であった。女子学生は相対的に男子学生より自信をもっており、性差が認められた($\chi^2=12.736$, $df=3$, $p<0.01$)。一斉群の「教える自信がある」の男子学生は28.9%、女子学生は16.7%で男子学生のほうが女子学生より自信がある。「かなり自信がある」は男子学生が15.5%、女子学生は36.6%を示し、「どちらともいえない」は男女とも30%前後であった。「あまり自信がない」は男子学生が26.7%、女子学生は16.7%であり、性差は認められなかった。この結果、学習形態からみると男子学生では一斉群の方がVTR群よりも自信をもった学生が相対的に多くみられた(一斉群男子学生:45.4%、VTR群28.7%)、女子学生の場合にはわずかではあるが逆の傾向が認められた(一斉群女子学生:53.3%、VTR群56.2%)。それは、VTR群は何度でもみることによりやり方がよく分かり教える自信がついたといえる。教師の指導による一斉群は、図3と併せて考えると、やり方が分かるとともに自信がついたのは教師の言葉かけが大切な要因といえる。すなわち、教師と学生とのコミュニケーションが重要な役

割を果たしている。

結 論

家庭科における手縫いの基礎技能について学習形態をVTR群と一斉群に分けて指導を行い、その意識と実態について調査した。結果は以下の通りである。

1. 基礎技能については、多くの項目に認知と実際の経験との間に相違があらわれた。経験があっても「習うより、慣れよ」と諺の如く実際にやって慣れることが大切である。
2. 技能は男子学生より女子学生の方が相対的に優れていた。これは小・中・高校の一貫した家庭科教育の成果といえる。
3. 学習形態については、VTR群は一斉群よりやり方を有意に理解した。しかし、一斉群のほうが学生にとって児童に教える自信がよりついた。それは教師の励ましや認める言葉かけが影響している。

今後、更にVTRの教材を開発するとともに個別指導の充実を図り効果を挙げていくための指導の工夫が大切である。

引用・参考文献

- 1) 文部省：小学校学習指導要領，第7章 家庭 pp. 87 (1977)
- 2) 林雅子他13名：改訂新しい家庭5，pp.9～11, 31～33 東京書籍 (1986)
- 3) 林雅子他13名：改訂新しい家庭6，pp.11 東京書籍 (1986)
- 4) 石田はる：和裁「和裁の基礎」pp.76～83 主婦の友社 (1984)
- 5) 兼信英子，坂井真壽子：小学校家庭科の手縫いに関する指導の考察，熊本大学教育学部紀要 第38号 人文科学 (1989)
- 6) 文部省：小学校家庭 指導資料「被服の指導」pp. 87～97, 149～190 開隆堂 (1982)

- 7) 有光成徳・柴田恒郎編著：VTR を生かす新技法，学習研究社（1981）
- 8) 佐伯 胖：わかり方の根源，小学館（1984）
- 9) 藤岡信勝：教育の方法 3 子どもと授業，「V. 教材を見直す」 pp.150～190 岩波書店（1987）
- 10) 宮本美沙子・加藤千佐子：やる気を育てる，有斐閣（1982）